

体育経営管理専門領域

柳沢和雄（筑波大学体育系）

1. あらまし

体育経営管理専門領域は、1964年日本体育学会内に体育・スポーツをめぐる諸課題の解決に向けた経営管理を研究対象とする分科会として成立した。ここ数年の会員数は約270名で、研究機関所属の会員のみならず学校や行政等の実務者も所属している。これまで体育・スポーツの経営管理に関する研究促進と会員の相互交流を図るため、月例会や合宿研究会を開催し、各種経営管理問題に関するディスカッションを行ってきた。また、会員への情報提供として発行されている会報は、2016年度で第51号となる。さらに近年では、若手研究者の研究促進のために研究助成を行うとともに、2009年から審査付きの学術誌「体育経営管理論集」を発行している。

2. 内外の研究動向

体育・スポーツ科学の中における体育経営管理専門領域は、実践科学的な性格を有するとともに、それ故に応用科学的な側面を持つ研究領域である。すなわち体育・スポーツの経営管理はその実践領域の発展を前提に研究がなされることになるので、学校体育から地域スポーツ、民間営利スポーツ、観戦型スポーツ、それらに関わるスポーツ法制度やスポーツ産業等々、その研究対象となる実践領域は発展的に拡大する。研究方法論をめぐっては、スポーツ文化の発展やスポーツ行動の促進を目指したスポーツ事業の検討など、体育経営管理が独自に開発しなければならない技術論や理論の展開が本領域のオリジナリティになる。同時にそれらスポーツ事業の開発と展開を担う体育経営管理の組織論や経営論も問題としなければならない。この課題については一般経営学における先行知見で援用可能な理論も多いため、組織構造論や組織文化論、リーダーシップ論などの組織理論が導入されたり、ビジネス領域まで研究関心が拡大するようになると、マーケティング論を基礎とするスポーツマーケティング研究が急増してきた。もちろんそのような一般理論の援用可能性の中に看る、体育・スポーツ科学の固有性も強く意識されねばならない。

体育経営管理専門領域の設立後、研究対象や研究方法が隣接する学会が設立されてきた。なかでも1952年設立の体育管理学会を前身とする日本体育・スポーツ経営学会（JSMPE）は歴史があり、本領域の会員も多く所属している。また、1990年には日本スポーツ産業学会（JSSI）が、2007年には日本スポーツマネジメント学会（JASM）が発足している。また2000年に設立された日本体育・スポーツ政策学会（JSPPE）も密接な関連学会である。海外では、スポーツビジネスや産業の発展を背景に北米スポーツマネジメント学会（NASSM：1987年）、ヨーロッパスポーツマネジメント学会（EASM：

1991年)、オーストラリア・ニュージーランドスポーツマネジメント学会 (SMAANS : 1998年) がある。また 2002年にはアジア地区の国際学会としてアジアスポーツマネジメント学会 (AASM) が設立されている ((社) 日本体育学会 : 2006) 。

3. 科学的知見の応用の状況

体育経営管理は実践科学的で応用科学的な性格を有しているものの、その科学的知見を体育・スポーツの現場に応用することは容易ではない。体育経営管理の多くの実証的研究は、研究対象となる組織の (仮説的な) 経営目的に接近したり諸課題を解決するために、基本的には、理論研究によって導出される原因-結果の関係を、手段-目的の関係に置換することで有効な手段や技術を認識し理論化しようとするが、仮定された原因が、結果を導き出す唯一最善の技術になるとは限らない。しかし、その客観的な因果関係の蓄積が、体育経営管理の実践家にとって選択すべき経営管理の方法や技術の情報源になることは間違いないであろう。専門領域や諸学会に課せられた課題は、公開される科学的知見を体系的に整理する枠組みをつくり、可視化し、経営管理の実践家に提供することにある。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

体育経営管理研究は学校体育の研究に端を発しているが、その実践領域が拡大するにつれ、学校体育を対象とした研究の割合は相対的に減少してきている。しかし、文部科学省による運動部活動の在り方への提言を受けた研究や、学習指導要領の改訂に伴う武道・ダンス必修化をめぐる問題、体罰の社会問題化を背景にした体罰関連の研究などがみられる。例えば、2015年度には、日本体育学会体育経営管理専門領域体罰・暴力根絶委員会調査研究報告「体罰・暴力根絶のための検討課題について」を本部に報告している。また、運動部活動の顧問教師の思考や行動への経営管理からのアプローチや体育科教員の成長や学びに関心をよせた研究も新たな研究課題となっている。一方、大学体育をめぐる体育経営管理研究は、その研究課題も未整理であり、現在のところ低調といわざるをえない状況にある。

5. 若手研究者へのメッセージ

若手研究者の皆様には、常識を疑うことを心がけて欲しいと思います。とりわけ体育・スポーツの実践に近くなればなるほど、日常にある体育・スポーツ現象が抱える危うさに無関心あるいは無意識になりがちです。体育・スポーツの内側から批判的に現象を捉える必要があるでしょう。また、体育経営管理の実践と研究領域は多様であり、あわせて研究者の価値観も一様ではありません。研究への価値自由度が高いということは、反面、研究者の立ち位置を相対化することを困難にさせます。それ故、専門領域の多くの研究者との議論が重要になり、その議論を通して新たな知見を獲得し、自己の考え方を相対化していく柔軟さが必要であると思います。

6. 引用文献

(社) 日本体育学会監修 (2006) . 最新スポーツ科学事典. 平凡社. pp.859-860

(2016年7月25日執筆)